

メルロ=ポンティにおける道德論の試み

川崎唯史（国立循環器病研究センター）

本発表の目的は、20世紀フランスの哲学者メルロ=ポンティの試みた道德に関する議論がどのようなものであったかを明らかにすることである。

メルロ=ポンティは、主著『知覚の現象学』（1945）において基本的な哲学的立場を示すとともに、その最終章「自由」において実践の問題にも着手したが、同書では道德を論じるまでには至らなかった。その後のメルロ=ポンティは言語論に身を移したと従来は解釈されてきたが、近年の研究によって、戦後の数年間に道德の問題に取り組んだ形跡が指摘されている。本発表では、それらの痕跡のうち最もまとまった論文である「小説と形而上学」（1945）を主な検討対象として、メルロ=ポンティの未完の道德論の解明を目指す。

「小説と形而上学」は、ボーヴォワールの小説『招かれた女』（1943）の読解という体裁を取っている。学生時代から倫理学を構想していたボーヴォワールによる文学作品の中に、道德に関する哲学的主張を見出そうとする好意的書評というのがその外見であるが、実際にはメルロ=ポンティ自身の道德に関する見解も織り込まれていると解せる。

「小説と形而上学」で主題となるのは他人との交流における道德であるため、本発表ではまず、『知覚の現象学』における他人の知覚に関する議論と、メルロ=ポンティが読む限りでの『招かれた女』の筋書きとの並行性を指摘する。具体的には、1）小説の主人公であるフランソワーズとピエールが一心同体的なカップル（「二人での存在」）を形成していることが、メルロ=ポンティのいう自他未分の癒合態に対応し、2）ピエールがグザヴィエールに惹きつけられることで、フランソワーズとの合一が虚構であることが露呈する局面が、自他は一つの状況を同じようには生きられないことを示す「生きられた独我論」と同様の役割を果たし、3）フランソワーズがグザヴィエールの見方で自分を捉えることによって自己を客体的に認識する場面が、主体が間主体性において對他存在をもち、他人が見るように自己を見る定めにあるという主張に相当する。

次に、以上の議論が道德の問題に関してどのような帰結をもたらすかを検討する。メルロ=ポンティの理路は、1）私の行為は私の意図の反映ではなく、それが他人たちとの関係の中でどのように現れるかによって意味づけられること、2）複数の意味づけの中で決定的に真であるものは存在しないこと、3）それゆえ或る出来事について責任を誰かに正しく帰属させることは不可能であること、これら三点からなる。常識的な格率を前提することなく、こうした間主体性の本性を示すことによって既存の道德を「爆破する」点を評して、メルロ=ポンティは『招かれた女』を「無道德的文学」と呼ぶ。

間主体性そのものが道德の存立を危ぶめることを指摘した上で、メルロ=ポンティは、道德的な行為が可能なのもやはり同じ間主体性においてのみであること、そしてその行為をなすかどうかは個々の実存に懸かっていることを主張する。大枠では道德の両義性としてまとめられる主張だが、本発表ではカミュの不条理概念やボーヴォワールの道德論との比較対照を通じて、メルロ=ポンティの道德論に固有の発想を明らかにすることを試みる。